

## 大賞

かけがえのない「いのち」

小林 登喜代

柳田邦男先生、ご無沙汰しております。お変わりありませんでしょうか。私は元気に過ごしております、今年もこうしてお手紙を書くことができ、ありがたく感じております。

私事ですが、今年六月に第三子を出産し、三人の育児に奮闘しています。忙しい毎日ですが、絵本には随分と助けられています。

六才になった息子は、相変わらずの絵本好きで、静かにしているなあと思ったら真剣に絵本を読んでいることがしばしばあります。また、赤ちゃんのお世話で、なかなか子ども達の相手が出来ない

ときは、息子が三才の娘に絵本を読み聞かせてくれていることもあり、見ていて微笑ましく感じています。

娘も、以前よりも絵本に興味が出てきて、同じ絵本の読み聞かせを繰り返しせがみ、お気に入り絵本は内容をしっかりと覚えていきます。まだ完全にはひらがなを読めませんが、内容を覚えているので、まるで一人で読んでいるのではと感ずるほどです。

そして、子ども達に絵本の読み聞かせをしていると、三ヶ月の下の娘もニコニコと笑顔になります。お腹の中に居るときから、いろいろな絵本に触れて、上の子達の反応も感じていたのだと思います。

この一年も、様々な新しい絵本との出会いがあ

りましたので、先生にご報告をさせて頂きたいと思えます。

妊娠中、そして出産後は赤ちゃんが産まれてくることに関係する絵本を随分と読みました。それらの絵本は、子ども達が、新しく家族を迎える為の心の準備をするのにとっても役立ちました。そして、一緒に胎動を感じたり、お腹の中の赤ちゃんに話しかけたりして、家族みんなで赤ちゃんの誕生を楽しみにすることができました。また、産まれてきた赤ちゃんに対しても、優しく接してくれるています。

それらの絵本の中で、特に印象に残っている一冊が、「いのちは見えるよ」という絵本です。ルミさんという全盲の盲学校の先生である妊婦さんの出産に、隣に住む小学生のエリちゃんが立ち会い、

その後の子育てにも関わっていくという内容なのですが、この絵本を通して子ども達と「いのち」について深く考える機会となりました。読んでいる間、息子も娘もとても真剣に聞いており、ルミさんが頑張っている場面では、一緒になって応援していました。そして、息子は「みんな、こうして生まれてきたの？」と聞き、命の誕生の神秘さを、肌で感じたようでした。

また、全盲のルミさんが視覚以外の全ての感覚を使って育児をしている姿や、白杖の絵から、子どもと一緒に全盲の方の生活を想像し、深く考える機会になりました。

子ども達を、実際の分娩には立ち合わせることはできませんでしたが、絵本を通して赤ちゃんがどうやって産まれてきたか、そして自分もまた同

じように生まれて来たのだということを感じたのではないでしょうか。また、人は一人では生きていけない、支え合って生きているということ、そして両親から愛されて生まれてきたということ、少しでも感じ取ってくれたらなあと思います。

三人の子ども達と一緒にたくさん絵本を読みたいと思います。そして、復職した際には、絵本の素晴らしさを、多くの妊婦さんに伝えていきたいと思っています。

私は、助産師の仕事をしているのですが、絵本の中にも助産師が出てきて、子ども達にこんな仕事をしているのだと知ってもらえる機会にもなりました。絵本の題名の「いのちは見えるよ」は、命ある者全ての存在そのものが「いのち」であると感じさせてくれました。

自分の経験だけでは教えられないことを、分かりやすく子どもに伝えられる絵本の存在は、日に日に大きくなるばかりです。世の中には、まだまだ多くの素晴らしい絵本があります。これから、